

博士学位請求論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号

氏名 横路 佳幸

論文題目 同一性と個体——種別概念に基づく体系的アプローチ——

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授 柏端 達也
文学研究科委員

副査 慶應義塾大学文学部教授 上枝 美典
文学研究科委員

副査 慶應義塾大学文学部准教授 荒畑 靖宏

副査 千葉大学文学部准教授 秋葉 剛史

論文概要

「同一性」は哲学において最も基本的な概念の一つでありつづけてきたが、本稿は、その概念を統一的な視点から体系的に論じた論文である。本稿が取り組む主要な問題は、三つの相に分けられる。すなわち、第一に、同一性関係は形而上学的な観点からどのようなものとして特徴づけられるのか。とりわけ、その関係がなぜ、いかにして成立しうるのか。第二に、日常的な事物に対してわれわれが用いる「同一である」という表現や同一性言明は、意味論的な観点からどのように説明されるべきか。また、それらの表現や言明はいかにして適切な指示対象や真理値をもつのか。第三に、知覚主体としてのわれわれが日常的な事物に対して行なう認知的な同定・個別化を、認識論や心の哲学、あるいは知覚の哲学の観点からどのように理解すべきであるか。そしてそうした営みはいかにして成功するのか。以上に列举した広範な問題群に対して、本稿は、種別概念に基づいた一つの統一理論——本稿において「種別的な親和性によるアプローチ (SAA)」と呼ばれることになる複合的な説明図式——を提出することによって答えようとするものである。

論文の構成は次のとおりである。

序論

- 0.1 本論文のテーマ
- 0.2 本論文の目標
- 0.3 いくつかの留意点
- 0.4 本論文の構成

第一章 予備的考察：種別概念をめぐる諸前提

- 1.1 三つの前提

- 1.2 種別概念小史：アリストテレス・ロック・ストローソン
- 1.3 種別概念の役割：同一性規準の提供
- 1.4 同一性規準の諸問題
- 1.5 種別概念の分類：実体とその制限
- 1.6 種別概念の射程：裸の個体の不在

第二章 同一性関係の形而上学：相対主義から種別論的な絶対主義へ

- 2.1 同一性に対する根本的な疑問
- 2.2 同一性の「解明」
- 2.3 「解明」の系譜と玄関マット
- 2.4 ライプニッツの法則と同一性の反射性
- 2.5 同一性の相対主義：ロックとギーチ
- 2.6 数え上げとパラドクス：フレーゲとギーチ
- 2.7 フレーゲの分析
- 2.8 同一性の普遍的な種別論の拒否？：チザムとバーク
- 2.9 種別的多元論
- 2.10 存在論上のデフレ主義？
- 2.11 同一性の普遍的な種別論・再訪
- 2.12 種別的多元論の諸問題
- 2.13 同一性の種別論的な絶対主義と架橋原理
- 2.14 まとめ：同一性の相対主義から種別論的な絶対主義へ

第三章 同一性表現の意味論：バトラーの区別を擁護する

- 3.1 バトラーの区別
- 3.2 同一性表現の関係項
- 3.3 チザムの解釈
- 3.4 バクスターの解釈
- 3.5 ギーチ的な意味論上の相対主義
- 3.6 カプランの意味論から非指標的文脈主義へ
- 3.7 同一性表現の非指標的文脈主義
- 3.8 状況内のパラメーターと内包オペレーター
- 3.9 増殖戦略におけるパラメーターの措定根拠
- 3.10 同一性表現の非指標的文脈主義における理論的恩恵
- 3.11 ギーチの固有名論
- 3.12 固有名の指標主義
- 3.13 同一性言明の真理条件と顕性種別概念
- 3.14 まとめ：バトラーの区別を擁護する

第四章 認知的な個別化の認識論：認識的な種別概念主義の一形式

- 4.1 アリストテレス的なテーマの継承
- 4.2 認識的な種別概念主義の素描：ストローソン・ウィギンズ・ロウ
- 4.3 二種類の反論

- 4.4 どれであるかの知識
- 4.5 認知的な個別化についてのラッセルの原理
- 4.6 種別概念の把握と証拠主義
- 4.7 叙実主義的で証拠主義的な種別概念主義
- 4.8 第一の反論への応答：叙実的な証拠の重要性
- 4.9 第二の反論への応答：「個別化」の多義性
- 4.10 まとめ：認識的な種別概念主義の一形式

結論

付論A 「同一性」の二つの相：不可識別者同一の原理は妥当か

- 第1節 論争の概観
- 第2節 「同一性」・個体化の原理・ロックの原理
- 第3節 問題の所在と解決
- 結語

付論B 概念主義的实在論に向かって：原初主義と種別論的な絶対主義

- 第1節 同一性の原初主義
- 第2節 同一性の種別論的な絶対主義
- 第3節 概念主義的实在論による調停
- 結語

付論C 質料形相論的な構成主義：種別的多元論のさらなる展開

- 第1節 種別的多元論と構成主義
- 第2節 質料形相論的な構成主義
- 第3節 「形相」の多様性
- 結語

参考文献

各章の概要

第一章では、「同一性」の多角的解明に向けて予備考察が行なわれる。とりわけ解明のための基本的な道具立てとなる「種別概念」について、三つの前提が措定される。第一の前提は、種別概念の役割に関わり、「個々の種別概念はそれぞれに特徴的な同一性規準を与える」というものである。第二の前提は、種別概念の分類に関わり、「種別概念に分類されるのは実体的なものとは制限的なものの一部である」というものである。第三の前提は、種別概念の射程に関わり、「いかなる個体も何らかの種別概念に属する」というものである。これら三つの前提が、論文全体で提起される同一性に関する統一理論（SAA）を規定することになる。

以上の三つの前提についての説明と考察を通じて、種別概念と同一性規準とのあいだに強い結びつきがあること、また、同一性規準が種別概念に応じて多様性をも

つこと（「種別的多様性」）などが指摘される。なかでも、本論文の考察にとってとくに重要なのは、ある特定の種別概念に属する個体間の同一性関係が、その種別概念に固有の規準関係（ R_X ）の成立によって、成立する（すなわちその簡潔型として、 $\forall x \forall y ((X(x) \& X(y)) \rightarrow (x = y \leftrightarrow R_X(x, y))) \cdots (CI)$ ）という帰結である。また、本論文で中心的に扱う種別概念が具体的な自然物と人工物に限定されることや、前提により「裸の個体」の存在が否定されるといった論点も、第一章で確認される。

第二章の主要な仕事は二つである。一つは、同一性についてしばしば言われる単純性、原初性、定義不可能性という特徴を吟味し、しかしそうした特徴にもかかわらず同一性の概念が十分に「分析」可能である点を示すことである。著者は、「デイヴィッド・ウィギンズ的な解明」という（ストローソンの記述的形而上学的手法にも似た）観点から、同一性が、十分豊かに分析可能なテーマを形成することを示している。第二章のこの最初の部分は方法論的な問題を扱うものである。

第二章の後半では、著者が「種別的多元論」と呼ぶ独自の立場が導入される。対抗する立場としてまず、同様に種別概念を援用し、具体的な哲学的問題を解こうとしたジョン・ロック、ピーター・ギーチの相対主義的立場が描写される。それぞれ「ロック的な相対主義」、「ギーチ的な相対主義」として定式化された同一性に関する彼らの考え方は、それぞれのもつ難点を指摘され、批判される。そしてそれらに対抗して、絶対主義的な「種別的多元論」が提案され、その優位性が主張される。種別的多元論においては、異なる種別概念に属する個体はかならず存在論的に区別される。それによって、相対主義に陥ることなく、同一性に関して普遍的に擁護すべき種別論が維持可能であると論じられる。

まとめると第二章では、原初的で定義不可能な同一性関係が、あらゆる種別概念に対し絶対的で、ライプニッツの法則を満たす単一の同値関係でありながら、その成立が種別的同一性の成立によって形而上学的に基礎づけられるような関係として「解明」される（ $\forall x \forall y (x = y \leftrightarrow \exists F (x =_F y)) \cdots (BP)$ ）。

第三章では、意味論的な観点から問題が論じられる。最初に、ジョゼフ・バトラーによる伝統的な区別、すなわち同一性表現の「緩い意味」と「厳密な意味」の区別が、取り上げられる。その区別をめぐる現代の哲学者（ロデリック・チザムとドナルド・バクスター）の議論が検討され、著者の解釈が提示される。それは、同一性関係概念の単一性という本論文の方針を堅持しつつ、バトラーの区別が内包する意味論的特徴（ある種の文脈依存性）を説明するものである。

続いて、著者の解釈の基盤となる言語哲学上の立場として「非指標的文脈主義」が導入される。その立場はデイヴィッド・カプランの意味論の流れを引くものであり、一般に、意味内容の一定性（非指標性）と外延の文脈鋭敏性とを両立させるような理論である。その非指標的文脈主義が、調整され、同一性表現の問題に適用される。

第三章では、同一性表現の意味（意味内容）がライプニッツの法則を満たす二項的な同一性関係となる一方で、外延であるところの個体の順序対は、その表現を用いる文脈で決定される値踏みの状況内の種別概念パラメーター F の値に依存する、と結論づけられる。

第四章は、同一性に関する認識論的なトピックを扱う。第四章で導入されるのは著者が「認識的な種別概念主義」と呼ぶ見解である。その見解によれば、ある個体 o についての認知的な個別化とは、 o をまさに o 自身と同一のものとして再同定し、かつ o をその他の個体から識別する活動のことを指す。そして、その個別化活動の成功には、認知主体が o の属する特定の種別概念を把握すること、またひいては o が従う同一性規準を正しく把握することが不可欠であると論じられる。（この立場は、概略、ストローソン、ウィギンズ、E・J・ロウに倣ったものである。）

認識的な種別概念主義は、種別概念の把握が認知的な個別化に先行する（必要とされる）ことを主張する立場である。そのような主張には、直観的な受けいれやすさはあるものの、他方では、理論的もしくは経験科学的な反論が提出されてきた。第四章では、認識的な種別概念主義に対するそうした主要な反論が検討される。それらの反論に答えるため、本論文は、認知的個別化の活動を、ある種の命題知（特定の個体についての単称的な同一性命題を知ること）の獲得として規定する。そしてその種の命題知の獲得には、当の信念に正当化を与える認識的な証拠が必要であり、その証拠に相当するのは、主体による種別概念についての知覚経験であると論じられる。

第四章の主張をまとめると、認知的個別化は同一性の知識に関わる認識論的活動であり、その成功には、種別概念に関わる真正の知覚経験と種別的同一性についての正しい信念とを叙実的な認識的証拠としてもつことが、主体に要請される、ということになる。

最後に付された三つの付論は、本論を補強し、テーマのさらなる発展を適切に示唆するためのものである。付論Aでは、ライプニッツの法則の逆に相当する不可識別者同一の原理の妥当性を、ある条件のもとで擁護する。付論Bでは、同一性の原初性を認める見解と、同一性の種別的同一性への依存を認める見解とのあいだに見られる緊張関係の解消を試みる。付論Cでは、第二章で提示された種別的多元論をさらに強化し発展させるための理論的基盤の構築をめざす。

審査要旨

「同一性」はきわめて基本的な概念である。それはあまりに基本的であるため、しばしば、分析不可能であり、単純であり、自明であるとさえ言われる。「それ自身に対してかならず成り立ち、他のものに対してはけっして成り立たない関係」というよくなされる同一性関係の（たしかに明白な）特徴づけを見るに、それ自体はあらためて論じる必要のない原初的な概念であると考えられる向きも分らないではない。横路佳幸君はしかし本論文で、その傾向に抗して、同一性概念の「分析」と「解明」に真正面から取り組んでいる。すなわち、あるものがそのもの自身と同一であるということを自明の理と見なさず、それがなぜか、そしていかにしてかをあえて問うのである。これはすぐれて哲学的な問いであるといえる。

本論文が全体で高く評価できる点は、なによりまず、そうした根本的な哲学的問いを中心にしつつも、非常に大胆に幅広く、そして細部まで驚くほど詳細に、議論

を展開していることである。また、加えて評価に値するのは、各部の問題提起と立論、解答が高いオリジナリティを感じさせるものであるにもかかわらず、同時に、先行研究に対してきわめて豊かで周到な調査と評価を行なっている点である。文献表を含めると三百頁を超える力作であるが、最後まで一貫したテーマで体系的に、幅広く、そして独自性を維持しつつ書かれた論文である。

章立てに沿って審査のポイントを具体的に述べる。

序論と第一章では、論文のテーマと目的、および論証を展開するにあたってのいくつかの前提条件が、明確に示される。とりわけ論文の前提条件の明示は、横路君の研究プログラムが非常に自覚的なものであることを意味しており、それによって読み手はごまかされることなく論文を批判できるようになる（批判可能性は論文にとっての最大の美点である）。

第一章では、本論文における説明の中核をなす「種別概念」が導入され、規定される。それは広い意味でのいわゆる「種」——人、猫、河川、船、彫像など——を指すものだが、横路君はその概念を、アリストテレス、ロック、ストローソンという議論の伝統をふまえた形で説明している。種概念をめぐるその哲学小史にはオリジナリティがあり、議論にとって必要最小限の論点を押さえた啓発的なものである。

第一章で確認される前提のうち、とくに重要なのは、個体に同一性規準を与えることを種別概念の役割と見なす（上の概要で掲げた第一の）条件である。それは、種別概念を、テーマである同一性概念と結びつけるという点で、本論文の最重要テーマの一つである。この結びつきを中心に、「同一性規準」や「種別的多様性」、あるいは（次章の）「種別的一貫性」といった重要な説明概念が導入されていく。論文のテーマをめぐるそうした諸概念の導入に見られる体系性と手際の良さ、用意周到さは、著者の並外れた力量を伺わせるものであり、本論最大の特色の一つである。

第二章では、第一章にひきつづき、同一性というテーマをめぐる主に形而上学的考察が進められる。横路君は、慎重にも、同一性概念の単純性、原初性のあるいみ活かしつつ、同一性概念の「解明」という本論文の目標を達成するためにはどうすればよいかという方法論上の課題を検討することから（そして自身の方法論を正当化することから）始めている。この基礎的な課題は付論Bでより深く掘り下げられることになる。

テーマに関して、第二章では、「種別的多元論」という考え方（cf. (BP)）が提起される。それは、第一章で提示・導入した前提と道具立てをいわば一つにまとめあげるアイデアであり、本論文の主張の核心をなすものの一つである。種別的多元論を提起するにあたり、横路君は、自身のアイデアをピーター・ギーチの「相対的一貫性」と対比させている。種別的多元論のもつ絶対主義的側面と対比させるためである。そのために横路君は、ギーチの相対主義的なアイデアをジョン・ロックにまで遡り、丁寧な分析と区別を行なっている。

第二章においては、デイヴィッド・ウィギンズからの影響が比較的是っきりと見て取れる。しかしそれはただの引き写しではなく、横路君の独自の解釈と再構成を含むものである。同一性に関するウィギンズの説は難解なことで知られるが（それはウィギンズ自身が2012年の論文で認めている）、横路君は丹念にそれを解きほぐし、

十分明快な形で論じるということを行なっている。ピーター・ギーチの扱いについても同様である。ギーチは二十世紀の最重要哲学者の一人であるが、同一性に関する彼の学説については、これまで十分詳細な検討がなされてこなかった。横路君がこの文脈でギーチの考えを体系的に論じていることは、非常に価値がある。

第三章は新奇性に富んでいる。この章で横路君は、形而上学の観点からはいったん離れ、問題を、意味論および言語哲学の観点から捉えなおしている。われわれが普段どのように同一性言明を口にし、またどのようにそれに意味や真理値を与えるのかという観点からである。横路君は、デイヴィッド・カプランの議論の流れを汲む「非指標的文脈主義」を同一性言明に適用し、この章までに主張した同一性概念の単一性と、この章であらたに論じる重要なある種の文脈依存性とを調停しようとしている。高度に専門的な意味の理論を最新の議論をふまえて調整し、自らのテーマに適用する手腕は見事なものであり、またその発想の斬新さも高く評価することができる。

また、第二章では批判的に扱われていたギーチの相対主義を、この第三章では新しい解釈を施すことによって自身の議論の流れに整合させ、その哲学的直観を掬い取ろうとしている点も、たいへん興味深いところである。

第四章は挑戦的な章である。この章で横路君はさらに視野を広げ、同一性というテーマに関して、形而上学的分析の知見と、同一性の知覚や理解（すなわち認知的個別化の作用）との関係を考察する。そしてその考察を通じて横路君は、適切な種別概念の把握が個々の認知的個別化の活動（とその成功）に先行するというきわめて大胆な主張を行なうことになる。

種別概念の同一性概念に対する先行という主張は、前半の章で展開された種別概念による同一性概念の分析と基礎づけという方針に照らせば、至極もつともなものに見えるが、哲学的主張としては非常に擁護しがいのある主張である。横路君は、その主張が直面しうる理論的および経験的反論を、一つ一つごまかすことなく丁寧に検討し、自らの主張に対して一定の首尾一貫した擁護を行なうことに成功している。

以上のとおり横路君の論文には評価できる点が数多あるが、今後の取り組みへの期待を込めた疑問と不満が出なかったわけではない。とくに集中した二点に言及したい。一つは、論証を慎重に健全に進めようとした結果、関連が深いと思われるにもかかわらず詳細な検討からは意識的に除外されてしまったテーマがいくつかあるという点である。抽象的対象の同一性の問題や、メレオロジカルな組成コンポジションと同一性の問題などである。また、第四章において、個体の認知（認知的個別化）をある種の知識獲得の過程と同一視することは、視野に入れるべき問題の全体に対する“トリミング”ではないかという指摘も出た。二つめは、第四章のプログラムそのものに関わるものである。つまり、第四章では形而上学と認識論とを結びつける大胆で新しい主張を行なっているが、それをより説得的に展開するためには、認知や認識と形而上学的な「実在」とのあいだの関係についてさらに豊かな考察が望まれる、という指摘である。とくに、種別概念主義にとって叙実主義的であることがほんとうに必要なのかといった疑問が提起され、議論になった。以上の疑問や不満は、

しかし、横路君が論証を慎重かつ誠実に進めようとしたことの現われであり、同時に、まだ誰も論じていない領域へと果敢に踏みこんだ結果でもある。それらは、今後ますます思索が展開されることを期待しての指摘である。

上述したように、横路佳幸君の学位請求論文はきわめて高い学術的価値と独創性を備えている。審査委員会一同は、横路君の論文が学位授与にまさしくふさわしいものであると判断する。

2020年2月17日

審査委員会一同